HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学教育におけるピアサポートシステムのあり方に関する研究 ： 既往研究の整理と「北海道大学ピア・サポート」の実践から
Author(s)	岡本, 健
Description	日本ホスピタリティ・マネジメント学会 第20回全国大会. 2011年8月6日. 日本大学生産工学部 実籾キャンパス.
Relation	日本ホスピタリティ・マネジメント学会 第20回全国大会予稿集 pp.21-22
Issue Date	2011-08-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46921
Type	conference paper
File Information	summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

■　発表予稿原稿

大学教育におけるピアサポートシステムのあり方に関する研究

―既往研究の整理と「北海道大学ピア・サポート」の実践から―

A Study on Peer Support System in Higher Education

北海道大学　　岡本　健
Hokkaido University　Takeshi OKAMOTO

Keywords：大学教育（Higher Education）、ピアサポートシステム（Peer Support System）、北海道大学ピア・サポート（Hokkaido University Peer Support）

1. 本稿の目的

本稿の目的は、北海道大学でのピア・サポート実践の観察を通して、ピアサポートシステムの新たなあり方を提案することである。

2. ピア・サポートの現状と課題

本稿の背景は以下の通りである。大学生活にあって、大学生は様々な悩みを抱えることが多い。現状では､その際に､相談相手として友人や先輩、知人を選ぶ割合が高くなっている[1][2]。

しかし、現在は、学生のライフスタイルの変化やコミュニケーションのあり方の変化などから、こうした機能が自然発生しにくい状況が現出している。例えば、以下の状況がある。学校教育の現場で「コミュニケーション力」や「人間力」の涵養が重大なテーマとなっている。特にビジネスの現場で強く求められる能力として、これらが必要とされている。こうした価値観が支配的になることで､「腹を割って話しあい､互いの人間性を高めていけるような対人関係を築く能力」は重視されず､「いろいろな交渉事をスムーズに進め､場の空気を敏感に読み取って迅速に対処できるような対人関係の能力」が必要とされるようになり､「人間としての評価」もこうした能力の有無によって左右される事態になっているのである[3]。

ピア・サポートは、小学校・中学校・高校・大学などの教育機関、医療の分野、就職支援の分野など、様々な現場に導入されている。ピア・サポートとは､「仲間による支援･援助活動」である[3]。非専門家による対人的援助、という意味では、セルフヘルプグループと類似するところもあるが、「ピア・サポーターとして訓練を受けた者が自覚をもって仲間を支援・援助する」という点で異なっており、ピア・サポーターは独自の働きをするものとして位置付けられている[4]。ピア・サポートの役割は大きく次の 5 点に整理されている。1 点目は「先輩や友人」の役割、2 点目は「相談相手」の役割、3 点目は「調停者」の役割、4 点目は「教育者」の役割、5 点目は「学習支援者」の役割である[4]。

大学教育においてもさまざまな大学で導入されはじめているが、課題も多い。ピア・サポーター同士の情報交換や交流の場として、名古屋工業大学において開催されている「ぴあのわ」での各大学の活動報告から､以下の 3 点の課題を抽出した。

1 点目は、ピア・サポート自体の学生全体への認知度が低いという問題である。ピア・サポート室の立地条件や広報のあり方に関わってくる。

2 点目は、組織としての役割が不明確であるという問題である。ピア･サポート設立の経緯は様々であり、目的も様々であるが、ピア・サポーター自身が自分の所属する組織の役割を明確に理解していない場合があり、実施される企画が目的にそぐわないものであることがある。

3 点目は､成員が維持できなくなる問題である。この場合の成員の維持とは、成員の数と成員の質の維持である。成員の質には、成員のモチベーションや能力が含まれる。

3. 北海道大学におけるアクションリサーチ

本稿では、目的を達成するために、実際に北海道大学においてピアサポートシステムの運営に関わるアクションリサーチを行なった。

アクションリサーチを行う際には、2 章で抽出した 3 点について成員にも周知を行い、これら問題を認識した上で組織運営を行うように務めた。本稿では特に 2010 年度、2011 年度に開催された「本活」というイベントを軸に分析を行う。

4. 北海道大学ピア・サポート

北海道大学ピア・サポートの設立経緯や諸活動の詳細は紙幅の都合で割愛するが、大まかな流れをここで整理しておく。詳細については、北海道大学ピア・サポート活動報告書に詳しいので、そちらをご覧いただきたい[5]。

北海道大学ピア・サポートは 2009 年 5 月 14 日から数回にわたって、教職員および学生によるピア・サポート室設立準備委員会が開かれた後、2009 年 11 月より、活動を開始した。

業務は主にインテーカー業務を担うことであり、学内にあるサポート資源を学生に紹介するような活動が求められている。

ただ、活動開始当初は、学生の通行量が少ない通路にあったため、来室者が少ないという問題があった。開室後しばらくは、さまざまな資料を収集するなどの作業があり、モチベーションも維持できていたが、来室者数が少なく、3 章で整理した課題である利用者への周知不足、および、利用者が少ないことによる成員のモチベーションの低下が懸念された。

そのため、新年度を迎える 2010 年 4 月に向けて、先輩から後輩への本の受け渡しを行うイベント「本活」を開催した。本イベントの目的として、以下の 4 点を挙げていた。 1 点目は、学術的な引継ぎを行うこと、2 点目は、本への興味・関心を喚起させること、3 点目は、ピア・サポートの広報を行うことであり、4 点目はピア・サポーターの経験値向上とピア・サポーター同士の交流促進、であった。

2010 年 4 月 12 日～16 日、20 日、24 日に開催された本イベントには、立地条件の悪さにも関わらず 400 人を超える来場者が訪れ、4 月の相談者数は 15 人であり、成員のモチベーションが保たれる結果となった。また、その際には利用者へのアンケート調査も行い、利用者の状況やニーズの把握に務めた。そのため、成員が自らの組織の役割について考える素材を得ることができた。

その後、2010 年 11 月からは、ピア・サポート専用の部屋が用意され、学部 1 年生が多く通行する場所に移動した。

「本活」は、形を変え、2011 年 4 月にも実施され、4 月 11 日～4 月 15 日、4 月 18 日～4 月 22 日の計 10 日間で、969 人の来室者があり、163 件の相談があった。4 月度の来室者合計は 1,147 人を数えた。これは 2010 年度の年間来室者数を超える数である。

他にも、広報ビデオ「苦楽戦隊ピア・レンジャー」の制作、ピア・カフェなど盛んに活動を行なっており、成員のモチベーションが持続している。

5. つながり創出型ピアサポートシステム

北海道大学ピア・サポートの活動は、相談業務というよりは、大学内のつながりを増大させるような活動であると言える（図. 1）。2010 年度本活では、学生とピア・サポーターのつながりを深めることができており、2011 年度本活では、その関係性に加え、大学生協という大学関連組織とのつながりを作っている。

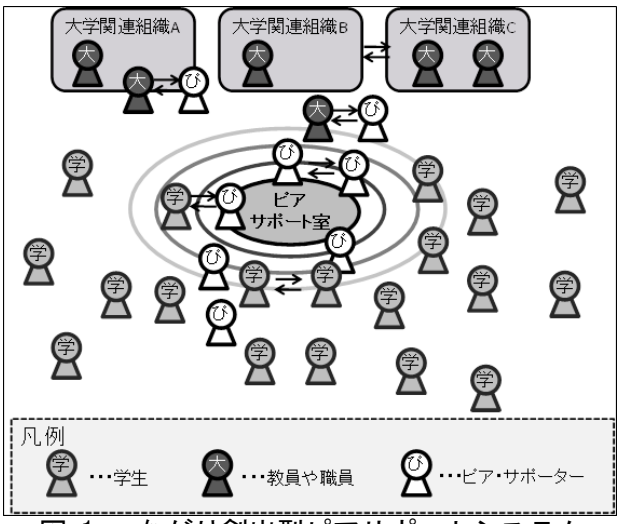

図. 1 つながり創出型ピアサポートシステム

このように、つながりを創出させる新たな機能を持ったピアサポートシステムが今後どのような発展を見せ、どのような課題が見られるのか、今後も継続的な調査が必要である。

（注）

[1] 土屋貴之;「ピア・サポートの可能性」『大学と学生』, 87, pp. 29-43, 2010

[2] 北海道大学学務部;『学生生活実態調査報告書』, 北海道大学学務部, 2006

[3] 土井隆義 ;『友だち地獄 ―「空気を読む」世代のサバイバル』, 筑摩書房, 2008

[4] 早坂浩志;「学生に向けた活動 2 ―授業以外の取組み」日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会(編)『学生相談ハンドブック』pp. 185-201, 2010

[5] 北海道大学ピア・サポート活動報告書編集委員会;『北海道大学ピア・サポート活動報告書(平成 22 年度版)』, 2011